

主 題：遡られた王の誕生：最も高い所から
聖書箇所：ピリピ人への手紙2章5－6節

テーマ：神の御子イエス・キリストがどれほど“遡られた”のかを自分のこととして考える

神の御子イエス・キリストが、人としてこの世に来られたことをお祝いするクリスマス。約束されていた救い主が、約束のとおり誕生されたというこのすばらしい出来事は、これまで多くの人々に測り知れない喜びを与えてきました。思い返してみれば、一番初めのクリスマス、イエス様の誕生の知らせを耳にした彼らがとっていた行動は、みな同じでした。御使いによって「きょうダビデの町で…救い主がお生まれになりました。」（ルカ2：11）という知らせを聞いた羊飼いたちは、知らせを聞いてすぐに救い主を探し当て、それが確かな事実であると目の当たりにして、感謝をささげ賛美していました。ルカ2：20節にこうあります。「羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」また星に導かれるままイエス様のもとへとたどり着いた東方の博士たちも同じでした。彼らも救い主を目の当たりにして喜び、その御前にひれ伏してこの方をほめたたえていたのです。マタイ2：11にこうあります。「そしてその家に入って、母マリアとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。」こうして羊飼いにしても、博士にしても、イエス・キリストの誕生という出来事に心を留めた者たちは、そのあまりのすばらしさに感謝をささげずにはいられませんでした。彼らの心は喜びにあふれていたのです。そしてそれは、今の私たちも何ら変わりません。神の御子が人としてお生まれになったというこの知らせは、今の私たちのうちにも大きな喜びをもたらしてくれるのです。

でも、実際はどうでしょうか？果たして私たちは、きょうこのクリスマスを考えるときに、心から喜んでいのでしょうか？キリストが人として来られたというこのすばらしい知らせは、羊飼いや博士たちのように私たちの心を躍らせ、賛美に満ちあふれさせるのでしょうか？残念ながら私たちはこの点において難しさを覚えることがあります。時にその難しさは、忙しさからやって来るのかもしれませんが。クリスマスが近づいてくれば、私たちはいろいろな忙しさを覚えることがあります。その日を家族で過ごすことを考えている人は、その用意に追われているかもしれません。子どもや友人、大切な人にプレゼントを買うことに追われている人がいるかもしれませんし、クリスマスだけではなく、年末が近づいているために仕事に追われている人もいるでしょう。また教会にあってもさまざまなクリスマスの働きがあって、その準備に追われている人もいるでしょう。そのように日々忙しく過ごしていれば、クリスマスの本当の意味をしっかりとゆっくり考え感謝することよりも、目の前の出来事に心がとらわれてしまうことがあるのです。また時にその難しさというのは、慣れやよく知っているということからやって来るものかもしれません。馬小屋でお生まれになったイエス様、夜番をしていた羊飼いや、ささげ物を持ってやって来た東方の博士たち、そのようなキリストの誕生に関する話を毎年毎年耳にしているので、もう自分は知っている、という思いになっているかもしれません。そういった慣れが、私たちのうちに間違った態度を生み出すこともあるのです。だからこそ、クリスマスのこの時期に、私たちはいま一度、最も感謝するべきイエス・キリストの誕生、その姿に目を留めてみましょう。

少し立ち止まって自分自身のこととして、このキリストの誕生というものを考えてみましょう。特に私たちはきょうを含めて全三回にわたって、ピリピ2章のところから、「遡られた王の誕生」について考えていこうと思います。ですから、もしまだクリスマスの本当の意味を知らない方がおられるなら、ぜひそのことを一緒に考えてみましょう。なぜ、キリストの誕生が最高の喜びの知らせなのか、そのことをこの機会にぜひ知ってください。また、「そのすばらしさはもう知っている。」と言われる皆さ

ん、愛する主の誕生の偉大さを改めて考えてみましょう。そしてそれを考えるときに、一緒にその知らせの喜びを心から賛美しましょう。

まず、いつものようにみことばをお読みします。ピリピ2章を開いていただいて、きょう私たちはほぼ6節しか見ませんが、全体を考えるために1-11節までを一度お読みします。

ピリピ2：1-11

「1 こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、2 私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」

●背景：遜ることを求められたすべてのクリスチャンたち 5節

さて、私たちはイエス・キリストの誕生について、これから少し時間をかけて考えていきますが、その前に大切なことなので、このピリピ2章の流れを覚えておいてください。まず1節からこのように記されていました。1, 2節「1 こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあ、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、2 私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」と。気付かれたかと思いますが、パウロはここで、ピリピの兄弟姉妹たちが一致することを強く求めていました。同じ神の家族に属する信仰者たちが、同じ愛の心を持って心を合わせて一つのものとして生きていく、ということを願っていたのです。そしてその一致を保っていく上でカギとなるのが、謙虚さ、へりくだりでした。このように3-4節は続いていきます。「3 何事にも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」パウロは、信仰者ひとりひとりが高慢になることを、決してよしとはしていませんでした。そんなプライドというものが、教会の一致を乱す大きな影響を及ぼすものであるからこそ、すべての人々がへりくだって他の人を省みる、ということを求めていたのです。でも同時に、この謙虚さというものを述べる上で、パウロは「それでは、あとはそれぞれが自分で考えて行いなさい。」などと漠然と教えていたわけではありません。そこには、明白な模範となる存在がいたのです。だからこそ、彼は5節でこのように述べています。

「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」模範とはだれでした？その模範とは、もちろんイエス・キリストでした。そしてみことばは、キリストの最高の模範に倣って歩いていくということを、ピリピの兄弟姉妹たちに求めていたのですが、今を生きる私たちにも同じように求めているのです。キリストの弟子として歩んでいるのなら、私たちひとりひとりがキリストの姿に倣って、へりくだり、互いに仕え合っていくということが大切でした。このことに関しては、イエス様ご自身も求めておられたということを、私たちは別の箇所に見て取ることができます。たとえば、あの最後の晩餐の席において、弟子たちの足を洗われたイエス様が、その後このように言われていました。ヨハネ13：13-15に「13 あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。14 それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。15 わた

しがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。」と。イエス様は模範を示されていました。ですから、へりくだることにおいて成長を目指していくためには、私たちはいつも、このキリストの模範を覚え続ける必要があるということです。だれひとりとして例外はいません。この方によって救われて新しくされた者はみな、主が残してくださったその模範を、正しく学び続けていく必要があるのです。そしてこれこそが、自分自身の成長においてとても大切なものであるだけでなく、教会全体の一致にとっても欠かせないものになるのです。パウロは言っていました。「皆さん、一致してください。でも一致するためのカギはなんですか？一致するためのカギは、謙遜になることです。へりくだることです。へりくだるってどういうことですか？イエス・キリストの模範を見なさい。」と。そのような流れで私たちが見ていくのは特に6節以降の話です。この流れを覚えた上で、実際の内容を見ていきましょう。今回はピリピ2章、特に6節を見ますが、神の御子が人として誕生されたというこのすばらしい知らせについて、「へりくだる」ということを中心にともに考えてみましょう。

改めて6節を見ていただくとこのように書いていました。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず」ここで皆さんにまず気づいてほしいことがあります。それは、パウロが「キリストのへりくだり」というものを考えたときに、すぐに飼葉おけに寝かされている赤ん坊の姿に目を向けさせたのではない、ということです。彼は人として来られたイエス・キリストの姿を覚える前に、まずそれ以前の姿を人々に考えさせようとしていました。別のことばで言うなら、どれだけ低くなられたのかを正しく捉えるために、そもそも天において、この方はどれほど高い地位についておられて、そこからどれほどへりくだられたのか、どれほど下って来られたのかを見せようとしていたのです。皆さん、これはとても大切なことです。というのも、私たちがこのイエス・キリストの誕生を考える際に、時に視野を非常に狭めて考えてしまうことがあります。たとえばキリストの誕生を考えると、ある人は、この方が約束どおりにダビデの町ベツレヘムに生まれたことを覚えているかもしれませんが。またある人は、布に包まれて飼葉おけに寝ておられるということを覚えているかもしれません。確かにそれらの場面のうちにも、私たちは主の示された謙遜を見て取ることができます。でも同時に、私たちは、実際にイエス様が人として誕生された場面だけに目を向けるのではなくて、もっと大きな目でこのすばらしい出来事を考える必要があるのです。パウロはそのことをしていました。だからこそ、キリストの誕生について彼が触れるときに、彼はキリストが人として実際に来られるよりもはるか前から、この方がどれほど栄光にあふれた存在なのか、まず目を向けさせていました。どれほどの高みから下られたのかということ私たちが正しく覚えることが、どれだけへりくだられたのか、どれだけ低くなられたのかを覚える上で欠かせないということです。私たちは、パウロのことば特に6節のことばの中から、人として生まれる前、受肉前のイエス様がどんなに高いところにおられたのかを、二つ見て取ることができます。

○遜られた王：“どんなに高い所”から下られたのか？ 6節

1) キリストはすべての初めから永遠に神様であるお方 6a節

▷「である方」（現在形の分詞）

どれほど高いところにおられたのか、まず6節の前半の一つ目が記されています。6節「キリストは神の御姿である方なのに」このことばの内に見て取れる一つ目に重要なこと、それは、「キリストはすべての初めから永遠に神様であるお方」だということです。この方は赤ん坊として馬小屋に生まれるそれよりも前から、神の御姿として存在しておられた永遠の神様でした。この6節の前半部分を見ると、特に二つのことばに注目してみてください。まず、パウロは「キリストは神の御姿である方」と言っていました。「神の御姿である」というこの「である」ということば。覚えていて欲しいのは、この「である」という動詞には、現在形の分詞が用いられているということです。難しいと思った方、「だから

何だ？」と言われる方があるかもしれませんが、でも、これにはとても大きな意味があります。パウロはここであえて過去形を用いるのではなくて、現在形で記していました。言い換えれば、パウロは「神の御姿であるキリスト」のその状態というものが継続的なものであること、いつまでも続いているものであることを強調していたということです。現在形で書くことによって、その状態が継続的なもの、いつまでも続いているものであることをパウロは強調していました。イエス様はある時点では神様で、ある時点では神様でなくなった、ということでは決してありませんでした。イエス様は、この地上に人として来られる前は存在しておられなかったのでもありませんでした。この方はすべての初めからどんな時も変わることなく、いつも完全なる永遠の神様として存在しておられたのです。そのことに関して、もちろんみことばはいろんなところではっきりと示してくれています。たとえばコロサイ 1 : 17にはこうあります。「御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」また、私たちもよく知っているヨハネ 1 : 1-2 でヨハネもはっきりとこう述べています。「:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。:2 この方は、初めに神とともにおられた。」と。初めから神様とともにあって、神様であったことばは、一体だれのことを言うのでしょうか？ 続く 14 節にこう記されています。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」と。神であることばは、人としてこの地上に来られて、私たちの間に住まわれました。もちろんこの方こそ、イエス・キリストでした。そして何よりもそのイエス様ご自身がこのようにはっきりと言われるのです。ヨハネ 8 : 58 「イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」」と。ですから、これらのみことばからも明らかなように、イエス・キリストは、人として現れるその前から永遠に存在しておられたお方でした。人として来られたのがスタートだったのではありません。人として来られる前から永遠に神様として存在しておられたのです。

▷「神の御姿」（御姿：ギリシャ語モルフエー）

でも皆さんに注目してほしいのはそれだけではありません。もう一度ピリピに戻って、この一つ目のことばに加えて、二つ目に注目してほしいのは「御姿」ということばです。「キリストは神の御姿である方」とパウロは口にしていました。この「御姿」というのは一体何を意味しているのでしょうか。私たちがこの「姿」ということばを耳にするときに、どんなものを思い浮かべます？ 真っ先に思い浮かべるのは、何かを持っている形や、外見、また格好かもしれません。ためしに国語辞典で調べてみても、そこには、「物の全体としての形」とか「様子」「からだの恰好」、「人の身なり」というような意味が載っていました。外見とか恰好のことを言うわけです。ここでパウロが「キリストは神の御姿である方」という時に、パウロは、実際にイエス様は神様ではないけれど、そのような恰好や様子をしておられるお方だ、と言わんとしたのでしょうか？ もちろんそうではありません。ここで「御姿」と訳されていることばには、ギリシャ語の「モルフエー」ということばが用いられています。このことばには、確かに「外見」とか「姿」という意味があります。しかし残念なことに、この「モルフエー」ということばを「姿」とだけ訳すのは、このことばが持っている意味を十二分に伝えることができているということを知っててください。実を言うと、これにはもっと深い意味が含まれています。この「モルフエー」というギリシャ語にはもともと、「内側の性質と一致する外側の現れ」「内面的な本質に対応する外面的な現れ」というような意味を表します。難しいと思われた方、言い換えるとこういうことです。このことばは、「その人物の内側にある性質や本質というものがそのまま外側に現れること」「内側に存在しているその性質が完全に現されているその姿のこと」を指すのです。ですから、「キリストが神の御姿、神のモルフエーだ」とパウロが口にしたときに、パウロは単にキリストの外見の話をしていただけではなくて、キリストがその本質において、その内側の性質において、間違いなく完全な神様であることを明らかにしていました。キリストは神様のようなお方ではありませんでした。この方は、確かに栄光に満ちあふれた永遠に変わることはない神様そのものでした。それゆえイエス様ご自身のことを「ア

ブラハムが生まれる前から、私はいるのです。」とそう口にした時、そのことばを聞いたユダヤ人たちは、何かをしようとしました。先ほど見たヨハネ 8 : 58 の続きの 59 節にこのように書いていました。

「すると彼らは石を取ってイエスに投げつけようとした。」何で石を投げつけようとしたのか？それは、イエス様のことばが何を意味しているのかを彼らが理解していたからでした。彼らは、イエス様をご自分を「神様だ」と言われていることに対して、気付いていたのです。また同じことを別の箇所にも見て取ることができます。イエス様がヨハネ 10 章でも、彼を取り囲んでいるユダヤ人たちとこんなやりとりをされていました。ヨハネ 10 : 29 - 33 に「「…:29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。:30 わたしと父とは一つです。」:31 ユダヤ人たちは、イエスを石打ちにしようとして、また石を取り上げた。:32 イエスは彼らに答えられた。「わたしは父から出た多くの良いわざを、あなたがたに示しました。そのうちのどのわざのために、わたしを石打ちにしようとするのですか。」:33 ユダヤ人たちはイエスに答えた。「良いわざのためにあなたを石打ちにするものではありません。冒涇のためです。あなたは人間でありながら、自分を神とするからです。」」このようにみことばを私たちが見るときにはっきりとわかること、それは、イエス・キリストが昔も今もそしてこの先も変わらないまことの神様だ、ということです。この方は単なるひとりの優れた預言者でもなければ、良い教師のひとりでもありません。最高の御使いのひとりでもなければ、神様に限りなく近いような存在でもありません。この方は疑いようもなく栄光にあふれた神様ご自身でした。この方こそ、世界のすべてが存在する前から永遠に存在しておられたお方でした。この方こそ圧倒的な力を持って世界を創造された、ほかに並ぶものなど一切ない大いなる神様だったのです。イエス・キリストは人としての姿をとってこの世に来られる前から、永遠に存在しておられる神の栄光の輝きでした。みことばはこのように言います。ヨハネ 17 : 5 を見れば、このようにイエス様が祈っておられました。「今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」と。またヘブル 1 : 2 - 3 を見てみても、「:2 …神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。:3 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。」と。皆さん、これが神の御子の姿でした。これがすべての初めから存在しておられたお方の偉大な姿でした。この方は確かに完全な永遠なる神様でした。他のだれとも比べることなどできない、輝かしい神の栄光の輝きでした。

でも、ここで止まるのです。ここで私たちが考えるべきことは、この偉大な神様が、永遠に存在しておられた唯一まことのこの神様が人となられた、ということです。へりくだってこの世に来られたということです。最初からずっと存在しておられたその永遠なる神様が、人として来られたと。一体どれほど、キリストはへりくだられたのでしょうか？この方はどんなに高いところから、下られたのでしょうか？そしてもし私たちがこの方の模範というものを覚えるのであれば、私たちはどのようにして自分をへりくだらせようとするのでしょうか？かつてジョン・カルヴァンがこんなことばを残していました。「神の御子がこれほどまでに高いところから下られたのなら、無に等しい私たちが高慢になるのは、あまりにも馬鹿げたことです。」と。どれだけ高くから下られたのかを私たちが覚える時に、まさにその通りだと思いませんか？よく立ち止まって考えてみましょう。なぜなら世界の創造主なる方が、被造物である人のかたちを取られたのです。絶対的な権威を持つ全知全能のお方が、弱さを覚える者になられたのです。すべてのものに아가められて仕えられるべきそのような主権者が、仕える者になられたのです。想像できますか？私たちの限られた頭では完全には想像も理解することもできません。でも、神の御子がこんなにも高いところから下られたのだということを私たちが本当に覚えるのであれば、私たちがそのことに目を留めるのであれば、果たして私たちのような者に、何か一つでも誇り高ぶることができるものなどあるのでしょうか？私自身もこのメッセージを考えるとときにすごく考えさせられました。こんなにもへりくだられた方の前で、高慢に震えるような時など、あつていいのだろうか？キリストは一番初めから

永遠の神様としておられた存在でした。その方がへりくだられたと。でも皆さんこれで終わりではありませんでした。驚くのはこれだけではないのです。

2) キリストはすべての特権、権利を有したお方 6 b 節

この方はそのように天で最高の地位を占めていただけではなくて、それに伴う最高の特権というものも有しておられました。これが、私たちが6節に見て取れる二つ目に重要なこととなります。受肉前のキリストの姿を私たちが覚える時に、考えられる二つ目に大切なこと、それは、「この方はすべての特権を有したお方」だということです。すべての力を、権威を、権力を、特権を持っておられるお方でした。もう一度6節を見ていただくとこのように続いていました。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず」ここでカギになるのが、この「捨てられないとは考えず」ということばです。この箇所をさっと読まれた時に、このように考えた方があるかもしれません。キリストは神のあり方を捨てられないとは考えずに、とあったが、これは、イエス様が神様としての姿を一部でも捨ててしまわれたことを言っているのだろうか…と。人となられたその時に、イエス様は神様としてのあり方を捨ててしまって、100%神様ではなくなってしまうと言っているのだろうか…と。どう思います？もちろん、決してそうではありません。この方は人として来られる前も、また来られた後も変わることなく完全なる神様でした。先ほども私たちが見てきたように、イエス様ご自身が、地上に来られる前も、また来られた後も、変わらず「わたしは神である」と繰り返し、繰り返し訴えておられました。「アブラハムが生まれる前から、わたしはいる」と。「わたしと父とは一つです。」そのようなことばを大胆に述べ続けておられたからこそ、ユダヤ人たちは、「彼は神様を冒瀆している。」と言って、石打ちにして何度も殺そうとしていたわけです。ですから間違いなく、イエス様はその本質において、始めから終わりまで変わる事のない完全な神様の御姿でした。

では皆さん、ここでパウロが神様としての「神のあり方を捨てられないとは考えず」と口にされた時、一体これは何を意味していたのでしょうか？大切なのは、このことばが持っている意味です。「捨てられない」と訳されていることばですが、これは「何かを力づくで手にしようとする事」とか「何かにしがみついて手放そうとしないこと」またさらに言えば、このことばを「自分の益のために利用すること」というふう考える先生たちもいます。つまり、ここで「キリストは…神のあり方を捨てられないとは考えず」と言った時に言わんとしたのは、「イエス様は確かに神様である方にもかかわらず、ご自身が持っている力や権利、立場…そういうすべてのものを自分の益のために利用しようとは考えなかった」ということです。イエス様は確かに神様でした。永遠に存在しておられるまことの神様でした。けれど、この方が持つておられるご自身の力や権利、立場、そういったものをご自身の益のために利用しようとは考えなかったということです。ロバート・バウマンという先生がこのようにわかりやすく教えてくれています。パウロのことばについてこんな説明を加えるのです。「キリストはその性質や栄光の御姿において神でありながら、利己的な行動を取らず、自分の欲しいものを何でも手に入れ、優れた者として扱われることを要求しませんでした。全能の神にとって当然と思われるような行動を取らなかったのです。」と。すごいことが書いてあったと思いませんか？イエス様は見てきたように、間違いなく完全な神様でした。だからこそ、ありとあらゆることをご自分の意のままにする権利を持つておられるのです。天において天使や聖徒たちによってあがめられるということも、永遠の初めから持つておられた父なる神様と聖霊なる神様との交わりを楽しむということも、この方はご自身の権利として持つておられるのです。その権利をご自分のために用いたところで、だれひとりとして文句を言うことなど到底できない、それに当然値するお方なのです。なぜなら、この方は神様なのです。それにもかかわらず、イエス様はその特権をご自分のために使おうとはなさいませんでした。この方はご自分を喜ばせるために、天で持つておられるその特権や権威を用いようとはされなかったのです。その代わりイエス様は、ご自分の持つておられるそのような権威を一時的に横に置いて、人として、仕える者として、この地上に来

られたのです。皆さん、何度も言いますが、もちろんイエス様には、ご自分が持つておられる特権、権利を主張することのできる力も立場もありました。当たり前にあったのです。でもそんな最高の特権を自ら犠牲にしてこの世に来てくださり、父なる神様のみこころに従って、ご自分に与えられた働きを全うされたのです。少し思い返してみてください。私たちはイエス様が示された一つの模範、一つ姿というものをマタイ26章の中に見て取ることができます。覚えています？ゲッセマネの丘で兵士たちがご自分を捕まえにやって来た時に、イエス様は何と言われましたか？マタイ26：52から「:52 …剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」この後53節に「:53 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとでも思うのですか。」と。皆さん、イエス様がこう口にされた時、このことばは、口先だけのものだったのでしょうか？十二軍団よりも多くの御使いを遣わして取り囲む兵士たちをすべて滅ぼし尽くしてしまうことは、ただの口先だけで、実際にはできなかったのでしょうか？もちろん容易にできたのです。イエス様には当然、その力も権利もありました。でもそうすることはありませんでした。どうしてそれをしなかったのでしょうか？先の続きにこう書いています。26：54「だが、そのようなことをすれば、こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましょう。」と。イエス様はご自分のことを考えていたのではありません。ご自分の望みや願いを叶えることを優先していたのでもありません。そうではなくて、父なる神様のご計画が成し遂げられることに心を留めておられたのです。ですから、その妨げになるようなものであるなら、ご自身が持つてその力や権利をも行使しようとはなさいませんでした。皆さん、この状況をよく考えてみてください。イエス様は、ご自分がこの後兵士たちに捕らえられ、辱めを受けて鞭を打たれた後十字架につけられる、ということをご存じでした。それがいかに耐え難いものなのかということ、イエス様ご自身はよくわかっておられました。だからこそ、イエス様は兵士たちが捕らえに来る直前まで、ご自分に待ち受けているそのあまりの苦しさの前に悲しみ悶えながら、「父よ、みこころならばこの杯をどうぞ私から取り除いてください。」と祈っておられたのです。そのような苦しみを阻止する方法、そのような痛みを回避する方法を、もし自分が持つているならば、自分のことだけを考えて自分の益のために行動するということがいかに簡単で容易なことでしょう。でも、イエス様はそれをされなかったのです。イエス様はどんな状況に置かれようとも、最後までみこころに従うことを選択し、ご自分のために権利を用いることはありませんでした。このようにイエス様は、天においても、地においても、ご自身の持つておられる神様としての特権を捨てられないとは考えられませんでした。神のあり方を捨てられないとは考えなかったのです。この方は、ご自分のことを一番にしていたのではありませんでした。何度も何度も言いますが、イエス様にはご自分が持つておられるその神様としての特権を主張する権利が、間違いなくありました。そしてそれを主張しても、だれもノーなどとは言えませんでした。ご自身の主張どおり成されてよいお方だったのです。しかし、ご自分のためにそれらを使ってご自分を喜ばせることを選ぶのではなくて、父なる神様のみこころに従うということを望まれたのです。そして何よりイエス様はご自身をへりくだらせて人としてこの世に来られ、私やあなたのような罪人のために十字架にかかるということ、自ら選んでくださったのです。すべての初めから存在しておられる永遠の神様が、ありえないほど高く栄光にあふれた所から私たちのために測り知れないほどの犠牲を払って低くなってくださったのです。神のあり方を捨てられないとは考えずに、本来なら行使することのできる力や権利も一時的に横に置いて、仕える者としてこの地上に来てくださったのです。皆さん、この方は一体どれほどの犠牲を払ってくださったのでしょうか？どんなに高いところからこの方は下って来られたのでしょうか？

自分のこととしてよく考えてみてください。私たちがみことばを見ると、みことばははっきりと、私たちがみな罪と罪過の中に死んでいて、生まれながらに神の御怒りを受けるべき存在である、と明らかにしていました。本来なら、私たちは自分たちを造ってくださった創造主なる神様に従って、この方を

礼拝する者として生きていくべきにもかかわらず、それを自ら拒んで、好き勝手に逆らって生きていたのです。だからこそ、私たちはみな、一切の罪や汚れを受け入れることのなさらない聖い神様の前に、たださばかれるべき、御怒りのみ価するそんな存在でした。こんな罪に汚れたどうしようもない罪人の私たちには、自分たちの力で自分たちをどうすることもできるはずもなく、一切希望のないどん底にいたのです。そしてそれは自分たちの罪のゆえでした。でも、そんな私たちのために神の御姿であるイエス・キリストが、栄光にあふれた神の御子が、ご自分の特権を横に置いて、罪のためのなだめの供え物として死んでくださいました。本来であれば、私たちが受けるべきその罪の罰や神の怒りというものを、この方が身代わりとなって十字架で受けてくださったのです。そして自分の罪を心から悔い改め、この方を自分の救い主として信じ受け入れる者に、罪の赦しを、救いを与えてくださいました。一切そのような救いに与るに価しない私たちに、主が神のあり方を捨てられないとは考えずに、まずあわれみの手を差し伸べてくださったからこそ、私たちはただ罪の赦しに与ることができたのです。私たちが何かをしたのではありませんでした。一方的にこの方がそのように働いてくださったのです。一体どれほどの犠牲を払われたのか、一体どれほど高い所から下って来てくださったのでしょうか。

そして、このキリストの模範を私たちが覚えるときに、果たして、私たちが互いの間で示しているそのへりくだりとは、一体どのようなものでしょう？自分の権利等を横に置いて自ら進んで犠牲的に相手に仕えようとする、そのような態度でしょうか？自分の良い時もたとえ悪い時でさえも、自分のことを真っ先に考えるのではなくて、他の人の益となることに心を留めようとする、そのような態度でしょうか？それとも、自分の権利、自分の思い、自分の願い、自分の考え…いつも自分のことを主張し、いつも自分の益のためにすべてを成そうとしていないのでしょうか？どうでしょうか？キリストが、神の御子が、神のあり方を、ご自身の権利を捨てて、私たちのためにまず与えてくださったということを覚えるときに、果たして私たちは同じように自分の権利を喜んで手放そうとしているのでしょうか？主と周りの人に喜んでへりくだって仕えて、主が自ら進んで与えてくださったように与えようとしているのでしょうか？それとも、自分のものはどんなものでもしがみついて、決して離そうとしないのではないのでしょうか？これは皆さん、自分自身に問うことです。もし私たちが神の御子の謙遜を、知識ではなく本当に知っているなら、どのような謙遜を私たちは明らかにしようとしているのでしょうか？

そしてもう一つ、最初にこのみことばの文脈を考えたときに、私たちは、パウロが兄弟姉妹の一致を願って、そのカギとして「謙遜」というものを挙げていることを見ました。同じ主のあわれみによって救われた家族が一つとして生きていくようにと、命じられていたのです。そうだとすれば、私たちはよく考えなければいけません。私たちはだれひとり、自分の力でも知恵でも行いでも、それらのものによって救われ神の子どもとされた者は、いないのです。初めから終わりまで、すべてがこの方の大きなあわれみ、偉大なへりくだりのみわざのゆえでした。そうであるにもかかわらず、もし私たちが互いの間で高慢になっていたり、互いを非難して傷つけ合っているのだとすれば、互いに人を自分よりも優れた者と思わずに、自分自身のことだけを考えて、同じ神の家族に喜んで仕えようとしていないのだとすれば、間違いなく、それは主の前に罪だ、ということです。私たちがきょう見たこの中で、パウロは「あなたがたの間では、そのような心のままでいたらいいですよ。」と提案していたのではありません。キリスト・イエスのうちに見られるそのへりくだりというものを、私たちにも「その心構えでいなさい」と命令していたのです。私たちにはその責任があるということです。だからこそ、私たちは、きょう学んだこのキリストの模範を思い起こすことです。そして私たちのうちに罪があるなら、過ちがあるのであれば、神様の前に心から悔い改めて歩んでいくことです。

きょう私たちは、「キリストが初めから存在されていた永遠の神様」であって、「すべての権利を有されるお方」であるということを考えました。皆さん、この方は最も高い所から下られて、人となられたお方でした。これが、私たちが一つ目に見る、キリストのへりくだりの模範でした。感謝だと思いま

せん？イエス様は、このようにして私たちのためにこの地上に来てくださったのです。そうだとするならば、その主を知った私たちの責任は、この偉大な、へりくだられた王であるこの方の姿を覚えて、この方の誕生というものを覚えて、心からの感謝を持って歩いていくことです。